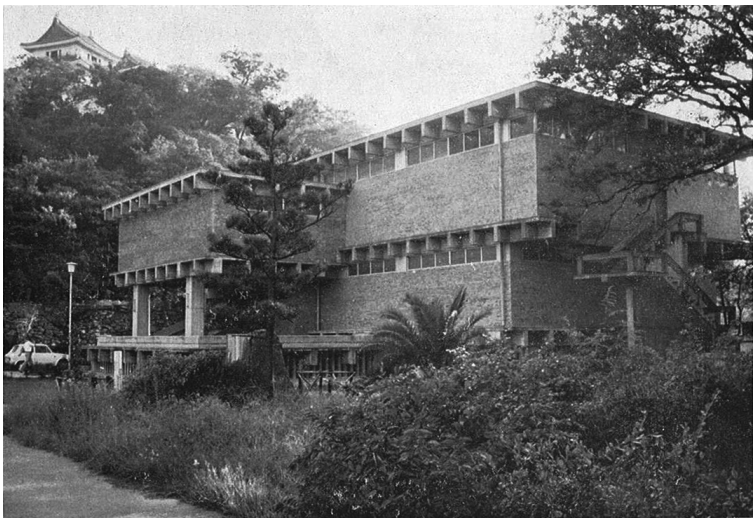
news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2021 **106**



和歌山城二の丸跡に開館した
和歌山県立美術館

開館当初の和歌山県立近代美術館
（和歌山県民文化会館 1 階）

現在の和歌山県立近代美術館
（黒川紀章設計）

展覧会とコレクションと
和歌山県立近代美術館 コレクションの50年

会期：2020（令和2）年9月19日（土）—12月20日（日）

開館50年を記念した展覧会のひとつ、「和歌山県立近代美術館 コレクションの50年」は、コレクション形成の歩みやその特色を当館の歴史とともに紹介するものでした。展示は3部構成とし、1963（昭和38）年から1970（昭和45）年までの和歌山県立美術館、1970年から1993（平成5）年まで和歌山県民文化会館内にあった期間の和歌山県立近代美術館（旧館）、1994（平成6）年の新築移転から現在までの和歌山県立近代美術館（新館）と、建物の変遷によって時代を区切りました。ここではその展示をたどることで、概観とはなりますが、改めて当館のコレクションの50年を振り返ります。

序章「1963-1970 和歌山県立美術館」では、当館の前身、和歌山県立美術館（以下、県立美術館と略）での収集活動を紹介しました。1963年3月、和歌山城二の丸跡に県立美術館が開館すると、毎年の和歌山県美術展覧会（県展）や国立西洋美術館の松方コレクションの展覧会などとともに、和歌山ゆかりの美術を紹介する活動が始まります。

紀州の陶磁器や桑山玉洲、長沢蘆雪など、江戸時代の美術を採り上げると同時に、明治から戦後にかけて活躍した、あるいは活躍を続ける和歌山県ゆかりの美術家たちの顕彰が行われます。具体的には川口軌外、日高昌克、石垣栄太郎、保田龍門、原勝四郎らの展覧会が開催され、それをきっかけとした作品の収集が行われました。

県立美術館は展示施設として整備されたため、当初建物に収蔵庫はなく学芸員も不在でした。1967（昭和42）年になってようやく「和歌山県立美術館運営指針」がまとめられ、活動理念や方針が定められます。同年には収蔵庫を増設、さらに嘱託という立場ながら美術の専門家も迎えられ、博物館施設としての整備が進みました。

また浜口陽三など、国内外で注目される県ゆかりの美術家については、展覧会の開催に依らない収集も行われ、それが展覧会へとつながっていきます。そして1969（昭和44）年3月には、和歌山県立近代美術館（以下、基本的に県立近代美術館と略）の開館を見据え[*1]、初代の学芸員が着任しました。

7年半の活動期間中に83点が収集され、それらは県立近代美術館に引き継がれます。そこには当館を代表する川口軌外《少女と貝殻》をはじめ、石垣栄太郎の《街》や《ボーナスマーチ》、保田龍門《少女》、原勝四郎《道化》、ヘンリー・杉本《カーメルハイランド風景》、野長瀬晩花《被布着たる少女》、浜口陽三《黒い背景のさくらんぼ》など、各作家にとって重要な作品が含まれており、それらは今にいたるまで当館の活動を支え続けることになります。

次に1章「1970–1993 和歌山県立近代美術館（旧館）」では、1970年11月の開館以降1993年まで、県立近代美術館が和歌山県民文化会館内に設置されていた時代の活動について紹介しました。

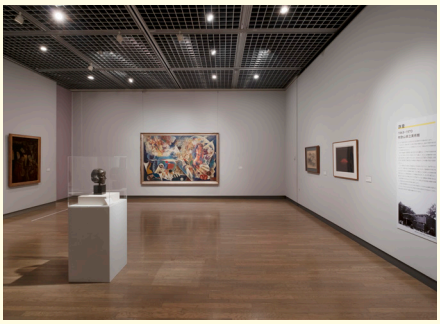
県立近代美術館では、県立美術館の収集作品と活動方針を引き継ぎ、まずは和歌山県ゆかりの美術家たちを掘り起こし、紹介する活動に力が注がれます。野長瀬晩花と建畠大夢の二人展を皮切りに、1982（昭和57）年度まで、川口軌外、吉田政次、硲伊之助、田中恭吉、木下孝則、村井正誠、高井貞二、建畠覚造、稗田一穂らの展覧会が順に開催され、それぞれが作品収集のきっかけとなります。

展覧会の開催には当然準備が必要です。作品の所在を探したうえで、文献資料も用いて調査と研究を行い、実際に作品を借用して展覧会を実施します。準備中、または実施後に県の美術史を形成する上で重要だと判断した作品は、購入して収集することも行われます。さらに作者本人や関係者から地元の美術館のためにと多くの作品が寄贈されることで、コレクションの基礎が形づくられていきました。

各作家の調査研究、展覧会を継続するなか、県ゆかりの美術家には、例えば石垣やヘンリー・杉本など、戦前にアメリカで活躍した画家が複数確認されるといった特徴が見えてきます。それは和歌山県が多くの移民を輩出したという地域的な特質を反映したものであり、そういった特徴が作品収集のテーマともなっていきます。

そのひとつが版画です。浜口、吉田、硲、田中らが、版画を主な表現手段のひとつとして制作を行っていたことから、美術表現としての版画が主要なテーマとして立ち上がります。展覧会での紹介はもちろん、体系的な版画コレクションの形成を目指して、収集にも力が注がれることになりました。

そして、版画への傾注は、1985（昭和60）年より2年ごとに5回開催された和歌山版画ビエンナーレ展へとつながります。同展は国際的な版画の公募展であり、版



序章：右から浜口陽三、日高昌克、川口軌外、石垣栄太郎。中央に保田龍門の作品が並ぶ。川口の《少女と貝殻》もこの時代の収集作品

1章：右から硲伊之助、木下孝則、木下義謙、石垣栄太郎、川口軌外、高井貞二、村井正誠、ヘンリー・杉本。中央右に建畠大夢、左に建畠覚造の作品が並ぶ

1章：右から白髪一雄、元永定正、前川強、大野俶嵩、星野眞吾。中央に小清水漸の作品が並ぶ

2 章：右の壁にムンク、ルドン、ピカソ、クレー、カンディンスキー。中央奥にマティス。左の壁にピカソの 2 点が並ぶ。左奥は石井柏亭の作品

2 章：右から北堅吉彦、湯川雅紀、河崎ひろみ、坂井淑恵。左から鈴木理策、佐藤時啓、野村仁。中央に原田要作品が並ぶ

画に力を注ぐ館の特色を国内外にアピールする目的もありました。各回の大賞 1 点と優秀賞 2 点、佳作あるいは買上賞に選ばれた作品は、同展実行委員会からの寄贈という形で当館に収蔵されます。

さらに近代美術館として同時代の美術に目を向けるべく、1983（昭和58）年より「関西の美術家シリーズ」と銘打った展覧会が8回継続され、作品収集にも「戦後関西の美術」という視点が加わります。1990 年に開催された「現代の陶芸 1980-1990」展も合わせ、主に展覧会を機に収集した白髪一雄、泉茂、吉原英雄、下村良之助、林康夫、山田光らの作品は、当館の戦後美術コレクションの核となっていきます。

県ゆかりの美術家を中心とする日本の近現代美術、版画、関西を中心とした戦後から現代の美術と、取り扱うテーマが明確になっていくなか、1988（昭和63）年に県立近代美術館と県立博物館の新築移転が決定されます。作品収集にも特別な予算が整備されるとともに、これまでの活動を軸にしながら、新たな視点を加えた「和歌山県立近代美術館美術作品収集方針」がまとめられました。

新たに海外の美術が収集方針に加わったことで、パブロ・ピカソの《泣く女》など西欧の版画、マーク・ロスコの《赤の上の黄褐色と黒》などのアメリカの戦後美術が積極的に購入されます。それらは版画というテーマや戦前の渡米画家の存在など、これまでの活動とのつながりを考慮して選ばれています。もちろん近現代の版画史を飾る作品、戦後日本の美術、県ゆかりの作家の重要な作品など、これまでの収集活動を基礎としながら、十分でなかった部分を補完、または充実させるための作品も購入され、コレクションは大きく成長しました。

第 2 章「1994–2020 和歌山県立近代美術館（新館）」では、新館建設に伴う特別な予算による収集作品と、現在までの新館における活動を紹介しました。

1994 年 7 月、県立近代美術館は現在の建物へ移転、展示と保存の環境を整えたミュージアムとして新たに活動を始めました。2 階に分かれて設置された展示室では、主催による企画展示とコレクション展示の同時開催が常に可能となります。コレクション展示の常設化は大きな変化であり、そこで示す美術の流れは、館員にとって強く意識すべき課題となり続けています。

特別な予算による購入作品とともに、開館に合わせ玉井一郎氏より寄贈された佐伯祐三の作品 14 点は、日本の近代美術の流れを示す上で、欠かせないコレクションとなります。新館では、新たに広がったコレクションを土台とし、さらに国内外の作家や美術館との連携を広めることで、より多面的な活動が展開されます。

作品収集に関しては、国吉康雄の《乳しぼり》など、コレクションを補完する作品の収集も進めますが、恩地孝四郎や田中恭吉、石垣栄太郎、川口軌外、村井正誠、また保田春彦や宇佐美圭司など、県ゆかりの美術家に関する調査研究、それに基づく展覧会の開催がやはり作品収集と密接に結びついていきました。

近年には、アメリカで発見された石垣の重要作品の里帰りを実現させたほか、西村伊作、北山清太郎といった同時代の美術に関わった県ゆかりの人物の活動を紹介する展覧会を通して、石井柏亭の《滞船》や岸田劉生の新出作品の収集が実現し、コレクションの幅は広がりを見せています。

版画に関しては継続して収集を進め、新版画集団に関わる作品や、謄写版による版画作品などがまとまって加わることで、他にないコレクションへと成長しています。その成果は当館コレクションを主体とした 2010（平成 22）年の「日本近代の青春　創作版画の名品」展、昨年の「もうひとつの日本美術史——近現代版画の名作 2020」展などにつながります。さらに版画に力を入れる美術館との存在感が増すことで、優れた作品の寄贈を受ける機会が増えるという好循環が生まれています。

関西の美術家の展覧会は継続し、作品収集も進みます。2009（平成 21）年には、そういった当館の活動が評価を受け、現代美術コレクターの田中恒子氏より、コレクションの一括寄贈を受けることにつながります。田中氏以外にも、森林平氏や篠田博之、めぐみ夫妻など、多くの支援者から作品が寄贈され、また匿名者のグループ「ブリッジ」から、現代版画を多数寄贈いただくという機会もありました。泉茂、井田照一、建畠覚造など、没後、遺族や関係者より作品をまとまって寄贈いただく

機会も続いています。

また国内外から本県に作家を招聘して行う作品制作と発表は、1996（平成 8）年に「紀伊半島を歩いて」でロジャー・アックリングとハミッシュ・フルトンが行い、1999（平成 11）年の「熊野の音＋熊野の色」、2007（平成 19）年の「森のなかで」でも実施されました。さらに地域 NPO の支援を得ながら、あるいはその活動に協力して、作家とともに県内各地で行うワークショップも、各作家の作品収集につながります。そして、2014（平成 26）年の「リアルのリアルのリアルの」展、2019（令和元）年と翌年の「おでかけ美術館」など、県出身の中堅、若手作家の活動を紹介する展覧会を実施することで、小柳裕（こやなぎゆたか）、坂井淑恵（さかいよしえ）、田中秀介（たなかしゅうすけ）など、これからの美術を担う作家たちの作品がコレクションに加わっていきます。

県立美術館の開館以来、点数の多寡はありますが、当館で作品収集が途絶えた年はありません。購入と寄贈、両方の方法で 50 年以上にわたって欠かさず収集を継続できたことは、近年の美術館、博物館をとりまく状況のなかでは特別な例となっています。もちろんそれは多くの先人たちの努力と献身、関係する方々のご理解と多大なご支援の賜物です。多くの方々とともにコレクションを継承し、育てていく活動はこれからも続きます。（宮本久宣）

*1 県立美術館は、県立近代美術館の開館にともなって廃館となりますが、建物は整備され、1971（昭和 46）年、和歌山県立博物館となります。美術に関しては、基本的に江戸時代以前を博物館、明治時代以降を近代美術館が扱うと線引きされます。

和歌山（ここ）に美術館がある理由（わけ）

美術館を展示する　和歌山県立近代美術館のサステイナビリティ

会期：2020（令和 2）年 12 月 1 日（火）―12 月 20 日（日）

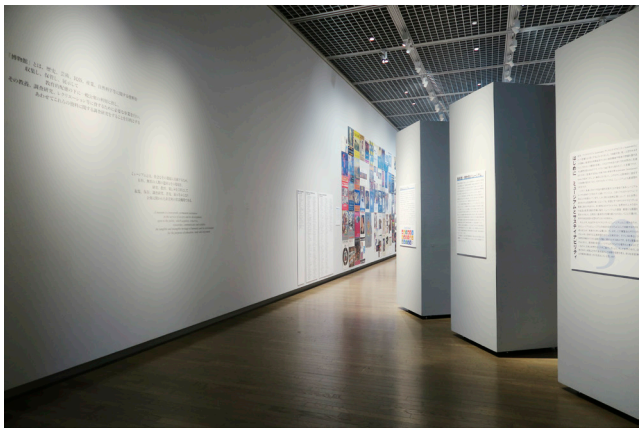
2020 年、当館では三つの開館 50 周年記念展を開催しました。ひとつ目はコレクションの特色である「版画」をテーマとした特別展「もうひとつの日本美術史――近現代版画の名作 2020」で、ふたつ目は美術館活動の基本となる作品収集の歩みを紹介した「和歌山県立近代美術館　コレクションの 50 年」です。これらふたつの展覧会は、コレクションの力点とその全体像という関係に位置づけられ、両方ともに「和歌山らしい周年記念展だ」との評価を多方面からいただきました。

こうしたコレクションを活動の中心に据えることが「当館らしい」と、私たちも自負します。そしてそうしたコレクションを中心として、美術館はさまざまな活動を行なっています。例えば日本の博物館は法律上、その仕事の内容を収集保存、調査研究、展示公開、教育普及と定められていますが、収集活動は幅広い仕事のうちの一部であり、そのほかの仕事もどれひとつ欠かすことができないものなのです。しかし、こと展示の場面となると、作品以外に光が当たることはほとんどありません。そのため今回のような 50 周年を振り返る機会にこそ、その多面的な活動を紹介することが必要ではないかと考えました。よって本展を「コレクションの 50 年」展と対になる関係として位置づけ、両展覧会を奥村一郎、宮本久宣、青木加苗の 3 人のチームで準備することにし、こちらの展覧会では当館そのものを展示することを目指して、「美術館を展示する」と名付けました。

「美術館を展示する」という展覧会タイトルからは、美術館とは一般に何をするところなのかを見せる展示とも読み取れるでしょう。この意図に基づく展覧会はこれまでにもいくつか前例があります。ここ 5 年ほどを振り返ってみただけでも、「No Museum, No Life?―これからの美術館事典」（東京国立近代美術館、2015 年）や、「学芸員を展示する」（栃木県立美術館、2016 年）、「〈正・誤・表〉美術館とそのコレクションをめぐるプログラム」（新潟市美術館、2018 年）などがありました。これらの展覧会では美術や美術館という存在の特殊性を浮かび上がらせたり、あるいはその知られざる「裏側」を垣間見せたりして、美術館という場の役割とその仕事が紹介されていました。

しかし私たちの思い描いた展覧会は、こ

「コレクションの 50 年」展と「美術館を展示する」展を表裏表紙にした二つ折りチラシ


「はじめに」では、博物館法と ICOM のミュージアム定義を壁面に掲示した

1章では県立美術館時代からのポスター、刊行物、美術館設立に関わる資料類を、写真のスライドショーとともに並べた

2章には不採択となった案も含めた複数の模型、実際の建築図面、モックアップ、写真・映像資料などを展示

れらの先例となる展覧会を参考にはしながらも、本質的には異なる目的を持ったものでした。それは上述のとおり、本展はあくまでも、和歌山県立近代美術館の50年の歩みを紹介するために設定されたものだからです。さらには、自分たちの活動を歴史として整理し、自己言及的に語る作業のなかから、何が美術館を美術館たらしめるのかを検証する手がかりを見出すことを目標としたのでした。こう書くと、かなり大胆かつ大きな目標には映りますが、当館が50年続いたという事実は、「当館がやらねばどこがやる?」という責任感にも似た思いを、私たちに抱かせました。そして当館にとっても、こうした作業こそがこの先の50年、100年をつないでいくためにも必要なステップだと考えました。

一方、サブタイトルにつけた「サステイナビリティ」という言葉は、ここ1年ほどでよく耳にするようになったものでしょう。日本語では「持続可能性」と訳され、国連が定めた「SDGs（エス・ディー・ジーズ Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標）」の文脈で使われることが多く、学校教育でもさかんに授業に取り入れられているので、実は大人よりも子どもたちの方がこの言葉に馴染みがあるようです。作品や資料を集め、未来へと残していくことがその仕事である美術館や博物館にとっては、「サステイナブルであること」すなわちこの先も続いていくことがその存在条件でもあります。このことはICOM（アイコム 国際博物館会議）のミュージアムの定義にある「a nonprofit, permanent institution 非営利の常設機関」という表現にも通じています。

けれどもそうした当たり前の大前提は、昨今脆くも崩れかけています。人々の暮らしごと丸々奪い取ってしまうような紛争や災害から、誰しも無縁ではありません。そこに2020年、新型コロナウイルスの猛威が、経済的にも精神的にも、世界中のミュージアム運営に決定的なダメージを与えました。もちろん地域によって程度の差はあれども、人を集めることを是とし、入館者数が大きな評価基準となる展覧会のあり方は根本的に覆され、また常にその扉を開き続けることは無条件に与えられるものではないと、私たちは知ることになりました。当館での臨時休館は、今のところ幸いにも緊急事態宣言が発令されていたゴールデンウィーク中のみに限られたものの、こうした経験は、この先も当館が「持続可能」であるためには何が必要なのかを考える必要性を知らしめました。実際、「和歌山県立近代美術館のサステイナビリティ」というサブタイトルは、各国が出入国を制限し始めた3月前半に付け加えたもので、この世界が大きく変わってしまうという不安が、この言葉の必要性を私に感じさせたのでした。

実際の展示は、以下の通り導入部と7章で構成しました。

はじめに：ミュージアムとサステイナビリティ
1章　和歌山県立近代美術館の50年＋α
2章　和歌山県立近代美術館という箱
3章　あつめてのこす
4章　託されるコレクション
5章　見せてのこす
　　展覧会とサステイナビリティ
6章　支えるしくみをつくる
7章　これまでとこれから

冒頭の「はじめに：ミュージアムとサステイナビリティ」と題した小さなコーナーでは、ミュージアムとは何かをあらためて考えていただくため、博物館法の抜粋とICOM規約に記されたミュージアムの定義を紹介し、加えてSDGsに対して美術館が果たすべき役割についても触れました。ここは簡単なパネルでの「説明」でしたが、これ以降はすべて当館の活動を具体的に紹介する展示としました。

1章の「和歌山県立近代美術館の50年＋α」では、1970（昭和45）年開館の和歌山県立近代美術館（旧館）と現在の場所に移った和歌山県立近代美術館（新館）での50年間に、1963（昭和38）年開館の和歌山県立美術館を前史として加え、展覧会を中心にその活動の流れを概観しました。壁面には展覧会ポスターを貼り、当時の細かな活動内容を紹介する全339号の月刊『美術館だより』から、新館へと引き継がれ、現在100号を超えた本誌『和歌山県立近代美術館ニュース』を切れ目なく並べました。エリアの中央にはこれまでのアルバムや当館についての新聞記事、さらには文部省に登録博物館として届け出た際の書類も展示しました。そして壁面にプロジェクターで投影した旧館時代の展示風景写真には、階下の「コレクションの50年」展に並ぶ作品が写っており、文字通り私たちの「足元」に、これまでの活動が存在することを示す空間を作りました。

2章の「和歌山県立近代美術館という箱」では、1994（平成6）年に竣工した黒川紀章設計による現在の建物を、和歌山城を背にした立地に基づくコンセプトや、実現しなかったものも含めた建築模型、設計図面、写真・映像による工事記録などで振り返りました。ここで建築をあえて「箱」と呼んだのはもちろん、美術館や博物館の建設が「箱物行政」と批判されることの多い公共事業のひとつだからです。他の建築と比べても、美術館や博物館は設備の面だけでも手間とお金がかかることは紛れもない事実ですが、箱がなければ私たちはその土地の文化の証となる文化財を守り続けていくことはできません。そしてどのような思いと願いとを持って新館建設が構想・実現されたのかを確かめ、それを引き継ぐ後代の私たちが箱の中で精一杯仕事をしていくことによって、地域にとって大切な箱となるべく育てていけるはずです。この1章と2章

3章より「明治以降郷土出身美術作家調査票」とそれを元にまとめられた『郷土の美術家 明治・大正・昭和の物故作家』(和歌山県立美術館、1968年)

3章内の展示「学芸員の調査道具(ごく一部)」

では美術館活動を回顧的視点で見つめ、みなさんの知っている現在の和歌山県立近代美術館が、過去の活動の蓄積の上にあることを感じ取ってもらうことを目指しました。

3章「あつめてのこす」は、調査研究と作品収集の仕事を具体的に示す場としました。冒頭には、和歌山県立美術館時代の1968(昭和43)年、「明治100年記念 郷土作家回顧展」開催の準備にあたって作られた分厚い「調査票」を置きました。この資料は明治時代から展覧会開催当時までに活動した和歌山ゆかりの物故作家を網羅的に調査したもので、その成果として同年に刊行された『郷土の美術家 明治・大正・昭和の物故作家』は、半世紀以上経った今でも、私たちに貴重な研究の手がかりを与えてくれます。そのほか新館準備のために組織された専門会議の承認を経て、和歌山県教育委員会が策定した「和歌山県立近代美術館美術作品収集方針」の中から、現在の紀の川市出身で画家・彫刻家の保田龍門と、田辺市中辺路町近露に生まれた日本画家の野長瀬晩花、さらには戦前に太地町から渡米した移民画家のひとりとして石垣栄太郎を代表させて調査研究と収集の展開を、また修復作業によって発見された村井正誠の作品と修復記録を紹介しました。

4章の「託されるコレクション」では、約8000点にのぼる寄贈作品の中から13例21作品を、寄贈者とともに紹介しました。寄贈のかたちを「作家本人から/関係者から/地域から/支援者から/コレクターから」と分類しましたが、そのどれもが唯一無二のケースであり、一つひとつが当館の豊かなコレクションを形づくっています。3章と4章は通常の作品展示としても成立する形式でしたが、一般に美術作品の展示は作品それ自体の意味や作者の創造性について語られるのに対し、今回の展示ではその作品が「ここにある意味」について紹介しました。それは「人」の観点から捉えた収集活動とも呼べるでしょう。

5章の「見せてのこす 展覧会とサステイナビリティ」では、展覧会という場を「展示室に作品が並び、来館者が見ている」という状況と捉え、それを「運ぶ/展示する/保存する/印刷する/貸し出す」に分けて紹介しました。「見せる=露出する」場である展覧会は、作品保存の観点では、さまざまなリスクに晒すということでもあります。しかしたくさんの方に見て知っていただくことで、最終的には作品の価値とそれを守る意味を知る人、つまり作品を守る人たちを増やしていくことにもつながっています。また今回は展示道具や作品の木箱などを、「もうひとつの日本美術史」から本展への展示替え作業1週間の早回し映像とともに紹介し、展覧会が人の手によって作られる様子をご覧いただきました。

6章「支えるしくみをつくる」で紹介した内容は、大きくふたつの観点に分けられます。まず2015(平成27)年に始まった展覧会スタンプラリーや1994(平成6)年の新館開館時から続く「友の会版画」は、美術と美術館を身近に感じる人を増やすための当館独自の取り組みです。そしてさまざまな教育普及活動のプラットフォームとなっている「なつやすみの美術館」展とそれを支える「和歌山美術館教育研究会」、また地域NPOとの協働で行なっているアーティスト・イン・レジデンスの展開などは、美術館を地域の人たちの活動場所として開く試みでもあるでしょう。

この6章から7章「これまでとこれから」にかけてはゆるやかにつながる空間とし、地域や美術館を訪れる人たちにとっての美術館像を共有する場を目指しました。7章には作品は展示せず、26年を過ぎたこの建物の改修工事についてのパネルと、普段は「なつやすみの美術館」展に際して行っている「ポスト」を設置しました。この「ポスト」はもともと、展示室内での鑑賞体験を各自が振り返る機会を設けることを目的に、またそれを用紙に記入してもらって掲示することで、その場に居合わせない来館者同士でも感想を共有できるようにしたものです。これまで続けてきたこの取り組みを今回は少しアレンジし、「あなたの『和歌山県立近代美術館』」と題して、各自が美術館にまつわる思い出を自由に記せる場としました。小さな用紙に記された「あなたの記憶」が、少しずつ集まって壁面を埋めていき、それを別の来館者が読むことで「私たちの記憶」として積み重なっていく、そうした機会を展示の中に組み込むことで、この展覧会自体がみなさんの記憶を重ね合わせる場となることを企図したのでした。

さて冒頭に記した通り、今回の展覧会には「何が美術館を美術館たらしめるのか」という問いを設定していましたが、そこに私はひとつの仮定を立てていました。それは展示の最後に共有した「私たち」という視点であり、その視点をこの展覧会全体、つまり美術館活動全体に敷衍できるのかを証明したいと考えていました。

実際に展示室では、1章や2章のコーナーで、来館者のみなさんがご自身の記憶と照らし合わせながら、思い出を語ってくださいました。それは私たち一人ひとりとこの地の足元の歴史が、美術館という空間で地続きになっているという体験の共有でした。3章や4章では、普段見ている作品の違った側面をご覧いただきましたが、私たち学芸員にとっても先達から引き継いだ宿題を再認識し、また美術館は社会の共有財産を預かっていることの確認にもなりました。5章では展覧会という空間を来館者と共有し、6章では当館のことを「私たちのホーム美術館」と思ってくださる方の多さを実感しました。こうして「私たち」という目線で今一度、展覧会を振り返ってみれ

4 章では、寄贈作品を寄贈者についての紹介とともに展示した

5 章では、普通なら展示室に残してはならない道具類もあえて見せ、壁面では展示作業の動画を放映

ば、50 年という時間を通底して、美術館を作ろう、守ろうとしてきたたくさんの人たちの思いが、今の自分たちと重なっていることを感じます。その「私たち」の輪が広ければ広いほど、深ければ深いほど、美術館はその地により強く根を張っていけるのだと確信を持つことができました。

また今回、初めて当館を訪れた方も多くいらっしゃったようです。たまたま展示室で言葉を交わし、あるいは「ポスト」への投函を通じて、また SNS 上で感想を見かけるなどして、共感を寄せてくださる方の多さに驚きました。こうした方々もきっと、「私たち」のひとりに加わってくださるはずです。

さらには、美術館や博物館がサステイナブルであるべき意味をこの観点から考えれば、この先に続く未来の人たちへと「私たち」の輪を広げていくことがその責務なのだと自信を持って言うことができます。地域に根付く人の営みは、時間や空間を超え、過去・現在・未来の「私たち」が共有することで文化となります。だからこそ美術館は、これから先もずっと、「私たち」のあらゆる文化をつなぐための装置として存在し続ける必要があるのです。

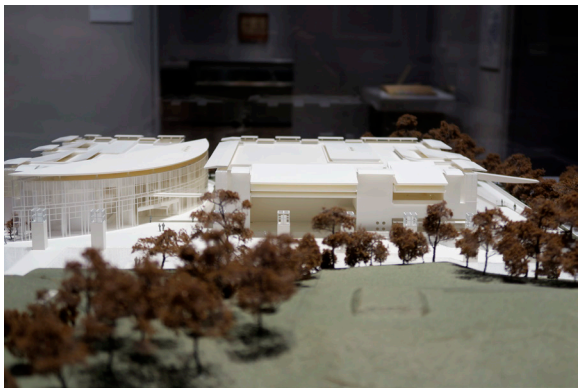
今回の展覧会は会期が短かったこともあり、展示室で掲出した全ての解説パネルと会場写真などを記録ウェブサイトとして公開しています。「あなたの『和歌山県立近代美術館』」も、すべてではありませんが掲載しました。ご来館いただけなかった方は、ぜひ一度ご覧になってみてください。そしてこの先、ご自身の目から見た「私たち」の視点を、当館に加えてくださることを楽しみにしています。（青木加苗）

記録ウェブサイト
www.momaw.jp/2020/momaw50/

美術館には作品以外にも様々な活動の記録が蓄積されていく。右手前に見える赤い物体は、地元 NPO との協力で佐藤時啓氏を招聘した際に作った移動型ピンホールカメラ「リヤカーメラ II」

「あなたの和歌山県立近代美術館」はウェブでも募集し、さまざまな記憶が集まった

建設前の建築模型写真



30 年近くの時を重ねた建築模型

「保存」の話をしよう。

⑯ 役に立ちませんように

近年、大雨が多いとお感じではないでしょうか。気候変動の大きさは、誰もが予測できた範囲を超えているようです。1994(平成6)年に完成した現在の建物は、旧館と比較してより充実した保存環境を保てるものでしたが、それでも足りないところがあります。

そのひとつが、はじめにふれた豪雨による影響です。とくにスロープの下など排水が間に合わず、溝や集水マスからあふれることも考えなければなりません。大雨の時には土嚢を積んで用心していましたが、写真のような止水板も備えました。簡単に早く設置できること、繰り返し使えること、収納の場所を多く取らないことが利点です。そして、私にとってありがたいのは濡れた土嚢の世話の必要がないことです。

当館の土嚢は、館員のだれでも扱えるように一般に使われている土嚢よりずっと軽く、ひとつ15kgくらい土砂を詰めて作っていますが、水に濡れるとずっしりします。それを洗って、中でカビが生えないように中身がさらさらになるまで干すのです。ひっくり返しながらなるべく早く乾燥させ、夜のあいだに雨が降るとまた始めからやりなおしですので日が暮れると取り込みます。袋が傷んだり汚れたりすれば詰め替えます。

止水板があるのなら土嚢はもういらないだろうとも思いましたが、まだ置いています。長いあいだ使ってきて、中の土砂も小石は選りだして、よく水を防ぐよい土嚢になってきたから惜しんでいるわけではなく、止水板だけでこれから本当に大丈夫なのかと思うからです。

水害や地震などの天災の被害をそのまま受けてしまえば、営々と続けている保存環境の管理が一度でダメージを受けます。なにが起こるかを考えて準備しておこうとすると、やはり土嚢もとっておこう、となるのです。できることをしていれば、いくらかでも被害を軽くできるはずです。おそらく個人のお宅でも、この頃ではさまざまな防災のための備えをしていらっしゃるでしょう。今年の雨のシーズンが穏やかでありますように。止水板も、役に立つ機会がないようにと思っています。（植野比佐見）

止水板を設置してみました

全部でこのくらいに収まります

土嚢は積んだら終わりではありません

Museum Calendar

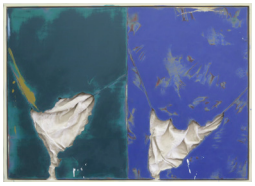
開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

4.24（土）– 5.30（日）
疎密考

4.24（土）– 7.4（日）
コレクション展 2021- 春　特集 うちのなかから

6.8（火）– 7.18（日）
もうひとつの世界

7.17（土）– 9.26（日）
コレクション展 2021- 夏
なつやすみの美術館 11 **野田裕示**「集まる庭」


野田裕示
《WORK 2136》
2018　個人蔵

7.31（土）– 8月4（水）
全国高等学校総合文化祭
「紀の国わかやま総文 2021」美術・工芸部門

8.15（日）– 10.10（日）
コミュニケーションの部屋

10.23（土）– 12.19（日）
特別展 和歌山県誕生150年　紀の国わかやま文化祭 2021 特別連携事業
和歌山の近現代美術の精華
第1部 観山、龍子から黒川紀章まで　第2部 島村逢紅と日本の近代写真

川端龍子
《雷雨》
1936

2022.1.8（土）– 1.23（日）
コレクション名品選

2022.1.12（水）– 1.16（日）
第75回和歌山県美術展覧会（県展）

2022.1.19（水）– 1.23（日）
第7回和歌山県ジュニア美術展覧会（ジュニア県展）

2022.2.5（土）– 3.27（日）
20世紀からおみやげ。
近現代美術のたのしみ

2022.2.8（土）– 4.17（日）（予定）
コレクション展　2022- 冬春
特集 バンカとその師・仲間たち

10.1（金）– 10.24（日）
おでかけ美術館 野田裕示展
橋本市教育文化会館（橋本市）

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会　会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。
詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：中川

和歌山県立近代美術館ニュース　No.106
編集発行／和歌山県立近代美術館　〒640-8137　和歌山市吹上 1-4-14
Tel.073-436-8690　Fax.073-436-1337　http://www.momaw.jp/
発 行 日／2021年3月30日　デザイン／鶴田デザイン事務所　印刷／株式会社 協和

和歌山県立近代美術館